

研究レポート

COVID-19収束後の子育て支援に求められるもの

— 参加者のインタビューデータの分析から —

What is Required for Childcare Support after the Corona Convergence

— An Analysis of Participant Interview Data —

星野沙織・時田純子・福永ひとみ・間中伴子

要旨

〔目的〕 COVID-19収束後に求められる大学での助産師参加型地域貢献の今後の子育て支援活動を展望することである。〔方法〕 研究対象者は子育て支援に参加した妊婦と母親7名であった。オンラインによる半構造化面接を行い、得られたデータを基に質的帰納的分析を行った。〔結果〕 【夫婦で一緒に参加できる企画】、【大学の専門家からのアカデミックな講義】、【対面で体験できる講義】、【専門家とのつながり】、【他のパパママ子どもとの交流】、【講義に集中できる配慮】、【子連れで参加しやすい時間・回数・方法】、の7つのカテゴリーが抽出された。〔考察〕 今後の子育て支援の企画には、夫婦とともに育児を学ぶ機会や他の家族との交流の場、信頼性の高い知識や直接交流による育児技術演習の時間、他の育児中の家族との交流と対話の機会、専門家と交流ができる企画、講義に参加しやすい配慮、特に当日の乳幼児に対する配慮が必要である。

キーワード：コロナ禍、子育て支援、妊婦・母親、助産師

Abstract

〔Aims〕 To explore future childcare support activities for midwives in universities that contribute to the community in a participatory manner after the end of COVID-19 pandemic. 〔Methods〕 The subjects were 7 mothers who participated in the childcare support program. Semi-structured online interviews were conducted, and qualitative inductive analysis was performed based on the data obtained. 〔Results〕 Seven categories were extracted: “projects that couples can participate in together,” “academic lectures from university experts,” “lectures that can be experienced face-to-face,” “connections with experts,” “interaction with other parents and children,” “consideration for concentrating on lectures,” and “easy-to-participate time, frequency, and method with children.” 〔Conclusions〕 Future childcare support plans should include opportunities for couples to learn child-rearing together and opportunities to interact with other families, reliable knowledge and time for child-rearing technique exercises through direct communication, opportunities for interaction and dialogue with other families raising children, plans for interaction with experts, consideration for easy participation in lectures, and especially consideration for infants on the day of the lecture.

Key words : COVID-19, childcare support, mother, midwifery

緒言

コロナ禍では、子育て支援活動の制限が余儀なくされ、対面が中心であった両親学級や地域での子育て支援活動は、SNSやオンラインによる子育て支援が主となった。外部との交流を制限され孤立した母親は、感染への不安から周囲との触れ合いを控えつつも、交流の機会を望んでおり(横溝, 2022)、不安や孤立感の軽減に向け、周囲とのつながりに視点を置いた支援の必要性が望まれた。

幼い子の母親の精神健康として、子どもの育てにくさ、発達への不安などがCOVID-19流行期の新たな心理的苦痛に関連することが示されており(木村・井手・尾島, 2022)、継続的な子育て支援が望まれている。コロナ禍の地域子育て支援センターを利用する保護者の相談では、第1期は「コロナ不安期」で、子どもが新型コロナウイルスに感染することへの恐怖や不安、第2期は「子どもの変化期」で、人見知り、場所見知り、睡眠、食事、言葉などについての子どもの発達に関する相談が多く、第3期は「気持ちの転換期」で、長引くコロナ禍の生活による疲労感や孤独感、諦めなどの感情から自分でなんとかしようとしてポジティブに考える保護者が多い(岡本・岡田, 2022)という結果であった。

本大学では、大学と地域の助産師会で協働し、2020年にオンラインサークルによる子育て支援、2021年にはオンラインと感染対策を十分に講じて大学施設を活用した対面での育児講座や体験講座を開催した。対面での活動では母親同士の交流は可能であるが、オンラインの子育て支援においても、「画面越しであっても、直接対話できること直接助言がもらえることが、母親にとっても救いとなっている」「自分だけではない、みな同じ」(時田他, 2023)との意見がみられ、母親同士の育児不安の解消や関係を深められていた。

佐藤他(2022)は、2021年度から大学においてパパママサークルを発足した。これは先駆的

な専門家と母子による周産期メンタルヘルスの実践である。本学では、時田他(2023)が、2020年からの助産師会などのオンラインサークル活動の参加者の心理的変容を報告した。これに引き続き星野・時田・間中(2023)は2023年に大学構内とオンラインでおこなったパパママ学級の参加者のインタビュー調査の概要を報告した。今回の論文はそのインタビュー内容のうち介入活動の効果に焦点をあてたものである。

コロナ禍における子育て支援活動から、COVID-19が5類感染症となった現在の支援方法として、感染症と共存し、新しい子育てスタイルを確立していく時期にあることがうかがわれる。コロナ禍で行動制限が敷かれた時期に顔の見える交流が望まれていたことから、今後も母親同士がつながりを持てる支援体制が必要となる。

コロナ禍の生活を経験した妊婦や乳幼児を育てる母親が子育て支援に求める内容を調査する事で、COVID-19収束後の妊婦や乳幼児を育てる母親の生活スタイルに合わせた子育て支援活動の企画、実施につながると考えられる。

I. 目的

本研究の目的は、地域貢献事業「パパママ学級」の参加者とのインタビュー結果を通して、COVID-19収束後に求められる大学での助産師参加型地域貢献の今後の子育て支援活動を展望することである。

II. 方法

1. 研究デザイン

研究方法は、質的帰納的分析であった。

2. 研究対象者

研究対象者は、2022年4月から2023年3月に東京純心大学で開催した子育て支援に参加した妊婦もしくは母親のうち、同意が得られた7名であった。研究対象は表1に示した、妊婦2

名、乳幼児を育てる母親5名だった。妊婦は30週前後、産後の母親は3～7か月の第1子、第2子を妊娠中の2歳児の母親であった。

「パパママ学級」の参加募集方法と研究対象者の選定およびインタビュー調査の実施

東京純心大学における2022-2023年の子育て支援活動は、妊娠期から母親とそのパートナーを対象に育児準備支援及び仲間作りの支援を目的として、オンラインか対面での「パパママ学級」を毎月一回実施するものであった。対象は、妊婦もしくは産後の母親とパートナーであった。子育て支援の内容として、オンラインでは出産準備や産後の生活などの説明と相談内容への対応（6回/年）、対面では沐浴・衣類の着脱やオムツ交換体験（3回/年）、絵本講座（2回/年）、おもちゃ（小麦粘土）講座（1回/年）であった。開催時間は13時～15時の2時間であった。

1) 企画への参加者の募集方法

本学で開催する子育て支援内容やスケジュールなどを記載した案内を保健福祉センターへ母子手帳を受け取りに来た妊婦に配布を依頼した。また、子ども家庭支援センターに健診で来た妊婦・母親に対し、案内を配布した。参加希望者は案内にあるQRコードからGoogle form

で参加登録を行うか、もしくは本学へ電話で参加申し込みをして、子育て支援担当者が参加登録を行った。

2) 研究協力の依頼とインタビュー調査の日程調整

本学で実施した子育て支援に参加した妊婦と乳幼児を育てる母親に研究協力依頼を行った。同意が得られた方へ研究依頼書と研究同意書、同意撤回書、返信用封筒を配布、もしくは後日研究同意の連絡をいただいた方には指定住所へ送付した。研究に関する連絡は、子育て支援参加時のメールアドレスに送ることの同意を得たうえ、メールにてインタビュー調査の日程調整を行った。インタビュー調査は、子育て支援に参加後、1ヶ月前後で実施した。

3) インタビュー調査の実施

データ収集期間は、2022年9月～2023年1月であった。インタビュー調査の対象は、妊婦や子育て中の母親であるため、web会議システムを利用しオンラインで行った。インタビュー調査への同意は、同意書の受け取りを持って同意とした。

まずweb会議システムを利用したことがない研究対象者には、インタビュー調査の前に

表1 研究対象者の基本属性

研究対象者	インタビュー時の妊娠週数	子育て支援へ参加時の状況		出産回数	子育て支援参加テーマ	同伴者
		(妊婦) 妊娠週数	(産後) 子どもの月齢			
A	妊娠29週	妊娠25週	—	0	絵本 沐浴	夫
		妊娠34週	—		絵本	
B	妊娠30週	妊娠26週	—	0	おもちゃ 沐浴	夫
C	—	—	産後 (3か月)	1	おもちゃ	夫
D	—	—	産後 (4か月)	1	絵本	夫
E	—	—	産後 (5ヶ月)	1	絵本	夫
F	—	—	産後 (3か月)	1	絵本	夫
			産後 (7か月)		おもちゃ	
G	—	妊娠23週 第2子	産後 (2歳6か月) 第1子	1	おもちゃ	夫 第1子

web会議システムの利用方法をメールで説明し、接続確認の日程調整をして接続確認を行った。インタビュー調査当日はweb会議システムにて45分～1時間の予定で実施した。インタビュー前に研究依頼書、同意書の内容を説明し、研究同意について再度口頭で同意について確認し、実施した。インタビュー調査終了後、謝礼と受領証、返信用封筒を送付した。謝礼の受領の確認として、受領証を返信していただいた。

なお、インタビュー調査の場所における配慮としては、オンラインで実施するため、リラックスできる、静かで会話が可能な室内を研究対象者に選定していただいた。体調に合わせて休息したり、産後の母親で子どもをみていただけの支援者がいない場合は、子どもの機嫌や体調、授乳やオムツ交換などに合わせてインタビューを中断し、子どもの世話ができる安全な環境を調整していただくよう伝えた。

4) 調査の質問内容

オンラインによる半構造化面接で子育て支援に求める内容についてインタビューした。面接の内容としては、大学の子育て支援に参加した感想、大学の子育て支援の開催時期・回数・開催方法について感じたことや改善して欲しい点、地域の大学で行う子育て支援に求めること、子育て支援に参加したことで役だったことの4項目であった。

3. 分析方法

分析方法は、①インタビュー調査で得られたデータを基に逐語録を作成し、②子育て支援に求める内容を抽出してコード化した。③コードの意味内容の類似性に基づいて、サブカテゴリー化をおこない、④サブカテゴリー間の内容の類似性に沿ってカテゴリー化した。分析の過程では、研究者間で内容を十分に検討し、データの解釈と妥当性の確認を行った。

4. 倫理的配慮

インタビュー調査にあたり、本研究の趣旨に関する説明を書面と口頭で行った。インタビュー調査の協力や辞退は自由意志であること、匿名性を確保することを説明した。インタビューの際には、内容をICレコーダーに録音する事への承諾を得た。本研究は、東京純心大学研究倫理委員会の審査で承認を得て実施した(承認番号2022-3)。研究データは、個人が特定できないように符号化し、鍵のかかった棚に保管し管理した。

Ⅲ. 結果

コロナ禍の子育て支援に求めるものについて、インタビュー内容を分析した結果、50のコードが得られ、統合した結果、13サブカテゴリー、7カテゴリーが抽出された。以下、カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを《 》、コードを〈 〉で表記し、表2にその詳細を述べた。なお7つのカテゴリーは、1)【夫婦で一緒に参加できる企画】、2)【他のパパママ子どもとの交流】、3)【大学の専門家からのアカデミックな講義】、4)【対面で体験できる講義】、5)【専門家とのつながり】、6)【講義に集中できる配慮】、7)【子連れで参加しやすい時間・回数・方法】であった。以下7つのカテゴリーごとに説明を行う。

1. カテゴリー1)【夫婦で一緒に参加できる企画】

カテゴリー1)【夫婦で一緒に参加できる企画】では、夫婦で参加したポジティブな感想があった。《夫婦で一緒に参加できる企画が有難い》では、〈(企画に)夫婦で参加できてありがたい〉〈夫婦で一緒に座っているだけで楽しかった〉と夫婦で参加したことを楽しんでいる状況であった。〈土日だから夫も一緒に参加できて楽しかった〉とあるように、夫の休日に合わせた企画は《週末であると一緒に参加しやすい》状況であり、夫婦で企画に参加することを目的としていた行動であった。

表2 地域貢献事業「パパママ学級」に参加した妊婦・母親が企画に求めるもの

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
1) 夫婦と一緒に参加 できる企画	夫婦と一緒に参加できる 企画が有難い	(企画に) 夫婦で参加できてありがたい
		夫婦と一緒に座っているだけで楽しかった
	週末であると一緒に参加 しやすい	気軽に二人で参加できた
		土曜日にパパも参加できる楽しい機会があるだけで満足
2) 他のパパママ子ども との交流	他のパパママ子どもとの 交流	土曜日だったのはありがたかった
		土日だから夫と一緒に参加できて楽しかった
		土曜日なので夫と参加できてよかった
	発達の違う子どもと ふれあう機会	他の妊婦や産後のママと交流できた
		産前産後の父母さんのリアルな声が聞けた
		他のパパの様子を主人と一緒に見れてよかった
気軽に子連れで交流できる 対面の企画	夫は身近で経験していない母と子の様子が見れてよかった	
	妊婦と子連れのお母さんが同席する方法がよかった	
	病院でオンラインはあったが、今回、他の赤ちゃんや妊婦さんが見れた	
3) 大学の専門家からの アカデミックな講義	教員の講義は安心感がある	いろいろな子がいたため成長するとこんなになるのかと違いがわかった
		女子学生を見て、将来の娘の姿と思いを馳せた
		隣にいた大きい子を見て将来こんな感じになるのかなと見れてよかった
	アカデミックな内容に 関心がある	子連れで外で交流できる方が好き
		対面で参加できる機会が少ないので、対面に参加できて嬉しかった
		気分転換にお出かけできて嬉しかった
4) 対面で体験できる講義	教員の講義は安心感がある	孤独な産後ママが息抜きで会話したいと思った時に行ける場所がほぼ無い
		大学の先生が講義していただくのは安心感がある
		研究に基づいて信頼できる情報が得られる
	対面での講義が役に立つ	夫はアカデミックな話に興味を持てた
		エビデンスのある話を聞けることが一番の期待
		専門的なことを教えてもらえる
5) 専門家とのつながり	対面での講義が役に立つ	大学で専門家がいるアカデミックな場に参加できてよかった
		自分では調べられない安全なマークの根拠を聞いて面白かった
		大学の場できっかけがないと知識を得られない話を聞いてよかった
	体験できる企画	具体的にこの本が良いと示してくれて役だった
		先生や学生の絵本の読み方が参考になった
		(講義を実際に聞くことで) 絵本を選ぶ視点が増えた
6) 講義に集中できる配慮	体験できる企画	小麦粘土を体験してハマったので次の休みの日に粘土を買いに行った
		夫が沐浴演習で赤ちゃんをぶつけた、やってよかった
		夫が沐浴体験をして「こんなに重いんだ」と実感できた
	助産師に相談したい	(実施して) 助産師さんに大丈夫ですよと言われてもらえて安心できた
		子どもと作業と一緒にできて楽しめた
		助産師に母乳育児のことを直接聞けるとよかった
7) 子連れで参加しやすい時 間・回数・方法	助産師に相談したい	頼れる地元の助産師さんとコンタクトをとりたかった
		助産師さんへの相談ができたらよかった
		直接(助産師と)個別相談できたらよかった
	講義後に教員と話したい	自宅地域を担当する助産師と事前に知り合いたい
		終わった後、先生が残ってくれて質問できてよかった
		講座の時間プラスお話しできる時間があるとよかった
講義に集中できる環境への 配慮	講義に集中できる環境への 配慮	お話を聞いているときに子どもを見てもらえるところがよかった
		子どもを抱っこしてもらいアクティビティに集中できる環境があるとよい
		(講義の部屋と別だったので) おむつ替えは、同じ部屋でしたい
子連れで参加しやすい時 間・回数・方法	講義に集中できる環境への 配慮	同じ部屋の一角に授乳やおむつ替えのスペースがあれば話も聞ける
		1~2ヶ月に1回が負担にならなくてよい
		企画内容は満足、時間的に子どもと一緒にでもちょうどよい
		対面とzoomの両方があるのでよかった

2. カテゴリー2)【他のパパママ子どもとの交流】

カテゴリー2)【他のパパママ子どもとの交流】では、育児中の他の夫婦との交流の楽しさの意義が明らかになった。対面だからできる《他のパパママ子どもとの交流》により〈他の妊婦や産後のママと交流できた〉〈他のパパの様子を主人と一緒に見れてよかった〉という経験につながっていた。直接的な交流により、〈いろんな子がいたため成長するとこんなになるのかと違いがわかった〉と《発達の違い子どもとふれあう機会》となっていた。コロナ禍で厳しい行動制限が敷かれた中では、〈孤独な産後ママが息抜きで会話したいと思った時に行ける場所がほぼ無い〉状況であったが、行動制限が緩和され、対面での子育て支援に参加できたことは、〈気分転換にお出かけできて嬉しかった〉と《気軽に子連れで交流できる対面の企画》に参加できることが嬉しさにつながっていた。

3. カテゴリー3)【大学の専門家からのアカデミックな講義】

カテゴリー3)【大学の専門家からのアカデミックな講義】では、科学的な情報提供の有効性が示された。〈大学で専門家がいるアカデミックな場に参加できてよかった〉〈エビデンスのある話を聞けることが一番の期待〉など《アカデミックな内容に関心がある》参加者が多く、根拠のある話が《教員の講義は安心感がある》ことにつながっていた。

4. カテゴリー4)【対面で体験できる講義】

カテゴリー4)【対面で体験できる講義】では、直接的な交流と活動の意義が明らかになった。〈先生や学生の絵本の読み方が参考になった〉〈(講義を実際に聞くことで)絵本を選ぶ視点が増えた〉など《対面での講義が役に立つ》ことにつながっていた。また、実際に《体験できる企画》へ参加し〈夫が沐浴演習で赤ちゃんをぶつけた、やってよかった〉〈小麦粘土を体

験してハマったので次の休みの日に粘土を買いに行った〉など実際体験したことで実践に活かされていた。

5. カテゴリー5)【専門家とのつながり】

カテゴリー5)【専門家とのつながり】では、助産師だけでなく幼児教育専門家との直接的交流の意義を提起している。〈助産師さんへの相談ができたらよかった〉〈頼れる地元の助産師さんとコンタクトをとりたかった〉など《助産師に相談したい》という気持ちで参加していた。他にも《講義後に教員と話したい》と意見があり、参加者は自分の不安や疑問について相談したい気持ちで参加していた。

6. カテゴリー6)【講義に集中できる配慮】

カテゴリー6)【講義に集中できる配慮】では、保育環境を整えることの重要性を指摘された。〈お話を聞いているときに子どもを見てもらえるとありがたかった〉と《講義に集中できる保育への配慮》を希望していた。また、〈同じ部屋の一角に授乳やおむつ替えのスペースがあれば話も聞ける〉など、《講義に集中できる環境への配慮》を望まれていた。

7. カテゴリー7)【子連れで参加しやすい時間・回数・方法】

カテゴリー7)【子連れで参加しやすい時間・回数・方法】では、運営方法の示唆を得た。例えば〈1～2ヶ月に1回が負担にならなくてよい〉〈企画内容は満足、時間的に子どもと一緒にちょうどよい〉など子連れでも参加しやすい企画内容・時間・回数を希望していた。開催時間については、13時～15時の開催であったことから、子どもとの活動や移動しやすい、日中の時間帯での参加が望まれていた。開催方法としては、〈対面とzoomの両方があるのでよかった〉と参加者が参加しやすい方法を選択して参加できることを望んでいた。

Ⅳ. 考察

本研究の結果から、子育て支援の参加者にとって有意義で、各夫婦が共有活動する楽しさが伝わってきた。また助産師と保育専門家との連携も効果的であった。更に今後の同様な活動を具体的に発展させるための示唆を得た。時田他(2023)では、2020年に実施した先駆的な実践の報告をしている。オンラインでコロナ禍でも子育て支援の有効性が示されていた。今回の研究では、オンラインと対面のミックスの実践の結果を報告した。今後は、オンラインと対面のメリットを活かした新しい開催方法をコロナ収束後の子育て支援に検討していくことが大切である。具体的には以下、得られた3つの知見と1つの課題を挙げたい。

第一の知見は、妊婦・母親のみではなく、夫婦とともに育児を学ぶ機会、更に、他の家族との交流の場の企画の重要性である。これは、カテゴリ1)【夫婦で一緒に参加できる企画】とカテゴリ2)【他のパパママ子どもとの交流】をまとめると、次のようになる。岡倉他(2021)や時田他(2023)の研究に加え、今回の実践では更に、夫が休日に参加しやすい曜日に開催したことで、夫婦で育児に向き合う時間を確保でき、将来的に夫婦で協力して育児を行うことを考える時間につながったという新たな意義を発見できた。

第二の知見は、信頼性の高い知識や直接交流による育児技術演習の時間の企画が今後とも期待されていることである。この根拠は、カテゴリ3)【大学の専門家からのアカデミックな講義】とカテゴリ4)【対面で体験できる講義】である。〈大学の先生が講義していただくのは安心感がある〉〈研究に基づいて信頼できる情報が得られる〉などから、正しい知識の習得を希望していることが伺われる。これは、対面での講義を受けた意見であり、オンラインでは直接の意見交換には限界がある。現在は、SNSの発達により手軽に多くの情報を得られるようになったが、一方で多くの情報から必要

な情報を選択することが難しい。そのため、大学の教員から正しい情報、新たな情報を得ることで安心感につながったと考えられる。大学での活動をおこなっていた佐藤他(2022)の研究では、コロナ禍で教育や交流の場が制限されたパパママにとって、育児の大変さの実感と共に、育児不安を軽減したい、他のパパママと交流したい、実際に体験して沐浴方法を学びたい、にあると示唆されていた。今回の研究では、育児体験だけでなく、大学の教員によるアカデミックな講義を望んでおり、育児への強い関心と正しい知識や情報を得たいという希望が強いことが分かり、その希望へ対応できていたと考えられる。

第三の知見は、他の育児中の家族との交流と対話の機会、専門家と交流ができる企画への期待があることである。これは、カテゴリ5)【専門家とのつながり】からみることができる。コロナ禍において、3密を避けるために母親学級などの開催が中止または制限され、病院での助産師との関わりも必要最小限となっていた。地域の子育て支援活動も開催されず、妊婦や母親は助産師とのつながりを得ることが困難な状況にあった。そのため、対面での助産師の関わりや地域の助産師とのつながりを求め、必要な時に相談できる関係性を望んでいたのではないかと考える。大学で専門家らと話す機会は、企画へ参加しないと得られない機会であり、講義から得た知識や情報は普段得られないこととして、特別な物であったと考えられる。

第四に、課題として講義に参加しやすい配慮、特に当日の乳幼児に対する配慮が課題となった。これは、カテゴリ6)【講義に集中できる配慮】とカテゴリ7)【子連れで参加しやすい時間・回数・方法】から今後の教訓が見出された。すなわち、妊婦や乳幼児を育てる母親に対し、体調面への配慮、子どもと一緒に参加できる状況は、講義に集中し、子どもの安全・安心について心配のない場となる。今回、建物の構造上、講義と授乳やオムツ交換の部屋

が異なる場所であった。この環境に対し、同じ部屋で講義や子どもの世話をしたいと意見ができたことから、改善する必要がある。企画への参加に際し、参加者が気軽に参加できるように講義環境、保育環境を設定することがとても重要である。

本研究では、「パパママ学級」を実践の対象にして今後への教訓を見出した。すなわち、大学の地域貢献、助産師と保育専門家とのコラボレーション、助産師の役割の増大、女性だけでなく男性とともに子育てを考えることの重要性、などいくつかの示唆が得られた。今後の助産師・専門家を含めた日本の子育て体制の更なる発展を期待する。

利益相反

本論文内容に関連する利益相反事項はない。

謝辞

本研究の実施に当たり、ご協力いただきました皆様に感謝いたします。また、本研究にご指導いただきました和光大学 いたうたけひこ名誉教授に深く感謝いたします。

文献

- 星野沙織・時田純子・間中伴子 (2023). 助産師が主催する大学の地域貢献事業の効果—インタビューデータを用いたテキストマイニング分析—. 第64回日本母性衛生学会総会・学術集会 (大阪).
- 木村美也子・井手一茂・尾島俊之 (2022). 幼い子をもつ妊婦・母親のコロナ禍の心理的苦痛とその関連要因: 子の育てにくさ, 発達不安, ソーシャルサポートおよび受援力に焦点をあて. 日本公衆衛生雑誌, 69 (4), 273-283.
- 岡倉美咲・山下恵・横手直美・吉田明恵・奥田浩子・川原直子 (2021). 出産施設と大学の協同によるオンライン子育てセミナー

開催報告 妊婦・母親のアンケート結果による評価とニーズ. 愛知母性衛生学会誌, 39, 46-52.

岡本千晴・岡田みゆき (2022). コロナ禍における地域子育て支援センターの役割保護者の相談内容から. 日本家政学会誌, 73 (5), 255-261.

佐藤初美・高島葉子・柳原真知子・伊藤文子・斎藤まさ子・内山卓秋 (2022). 令和3年度長岡崇徳大学版パパママサークルの実践結果とパパママの子育てニーズ. 長岡宗徳大学研究紀要, 3, 18-26.

時田純子・南幸子・青木智子・竹元仁美 (2023). COVID-19流行による自粛期間中にオンラインによる育児支援に参加した妊婦・母親の心理的変容. 日本母性衛生学会, 63 (4), 728-735.

横溝珠実 (2022). COVID-19禍で乳幼児の育児をする妊婦・母親の近所とのつながりに対する思い. インターナショナルNursing Care Research, 21 (3), 35-41.